

三重・鈴鹿支部

自分の願いを語る 仲間づくりに変わった!

全国大会後も仲間を増やし続けている鈴鹿支部の経緯を紹介します。

きっかけは「感動」の共有から

前進のきっかけは、全国大会に代議員で参加した加藤ひろみさんの大会報告でした。加藤さんは親子リズム小组で新婦人と出会い、その後もやめずに会員歴は数十年になりました。仕事もあり新婦人の活動にはなかなか参加できずにきましたが、退職を機に常任委員になり、昨年、人生初の全国大会に参加しました。

「新婦人がNGO団体だったことも初めて知った」と、全国大会への参加は新婦人の魅力を感じられる機会になりました。

支部への大会報告で「仲間づくりと運動は両輪で、仲間を増やすことは政治を変え、社会を変えていくこと。自分はこの素晴らしい団体に関わっていたんだと誇りに思いますが、新婦人を語れば、仲間が増える」そんな気持ちでこれからの活動を続けていきたい

との感想が、支部委員会で静かな感動で受け止められました。



次世代チーム「マイン」が初めて開催した「5・2NO WARスタンディングin鈴鹿」。デモカレンダーを見て40人が参加

せんでした。加藤さんの話から『仲間づくりを数や目標でなく、自分の願いから、新婦人をたくさんの人に知らせ、仲間になって』と話します。

今年は班から仲間づくりを

お誘いしているのは会員のつながりから。これまで声をかけてこなかった長いつながりのある人に思い切って、声をかけて会員に迎えています。『あなたが言うのなら』との信頼関係が土台にあると感じます」と谷口さん。

つばめ班は、班会をやっていた調理室に忘れ物を取りにきたAさんとバツリ再会。何しているの? 「実は新婦人の班会なの」と新婦人の話に、「この時間なら参加できるから私も誘ってよ」とAさん。後日、原爆展の開催や市へ給食無償化などの要請行動の話が聞き、「こういう活動なら入りたい」とうれしい入会に。

3月の委員会では、「今月お誘いできる人は?」「新婦人を知ってもらおう機会はあるか」と話します。

伝えることなんだ」との思いに変わりました。初めて仲間づくりに踏み出す人も生まれま

な?」と話す中で、春に退職する方の名前が、職場班と協力して地域のさくらんぼ班を迎えました。「今の社会を憂いている人は周りにいる。そんな人に、結果はどうあれ、私は平和や暮らしを守りたいの願いでやっている」と伝えることはできる。そう思えば仲間づくりの対象は広がるのでは」と話しています。

昨年9班中8班が仲間を増やしました。班も新たな会員を迎える中で、「新しい人が増えると元気になる」と受け止めています。これまでの支部委員中心の仲間づくりから、班からの仲間づくりが次のチャレンジです。「みんなで話し合っ、少しでも成長した鈴鹿支部になりたい」と谷口さんは話します。

中央常任委員の補充について

先の第197回中央委員会は、岡田尚子さん(中央委員、東京都本部事務局長)を新たに中央常任委員に選出しました。

談話

武器輸出全面解禁につよく抗議し、撤回を求めます

新日本婦人の会会長 米山淳子

高市政権は4月21日、「防衛整備移転三原則」と運用指針の改定を、国民の反対を無視して閣議決定のみで強行しました。非戦闘目的の救難・輸送・警戒・監視・掃海の「5類型」限定を撤廃し、殺傷武器を全面解禁したこと

憲法9条にもとづく日本の平和主義の根幹の一つである武器輸出禁止を大転換させたことは、海外メディアも「日本が平和主義を放棄した」と報じています。

2014年、「武器輸出」を「防衛装備品移転」の名称でごまかし、「原則禁止」から「原則可能」にしました。

2026年4月30日

日本は1976年に「平和国家としての立場」国際紛争の助長回避から武器輸出禁止を宣言し、81年には衆参本会議で武器輸出全面禁止を全会一致で決議し国是としました。その後のなごりを取り扱いはあったものの、さらに大きく変えたのが集団的自衛権行使容認を強行した安

高市首相は「武器輸出が日本経済の成長につながる」「継戦能力」の強化を」との答弁を繰り返しています。世

それでも、殺傷能力を持つ武器輸出には「5類型」を付けざるを得ませんでした。高市政権はさらに踏み込んで、戦闘機や護衛艦、潜水艦、ミサイルなどの殺傷兵器を全面解禁したのです。

世界で戦争が続けば儲かる、戦争がなければ生きていけない「死の商人」国家になることを公然と発言し、兵器の国際共同開発、軍需産業を全面的に支援する国営兵器工場の復活まで計画しています。これは米政府と日本の財界・軍需産業の長年の要求です。

いまま、アメリカのイラン攻撃をはじめ世界各地の戦争で、何の罪もない子どもや女性、おびただしい一般市民が殺傷され続けています。この痛ましい事態を許さず、「戦争とめる、憲法まもる」「武器輸出全面解禁撤回を」の声と行動を列島中に広げてください。



2026年4月30日

2026年4月30日

2026年4月30日

2 無自覚に身につけた「男らしさ」

教材として用いた文集の言葉を読み、自分たちの中にも似た文化があると気づいた男子校の生徒たち。「自分が無意識に、女性を軽く見ていたことに気づいた」「ホモソーシャルという言葉が、今までの出来事に当てはまっていて、ふに落ちた」という声がありました。一方で、「自分が今まで苦しめられたのも助けられたのもホモソーシャルだった」「良くないとは思いつつ、しょうがない部分はあると思うし、正直やめられない」と、自分の感覚を言葉にし始めています。



自分の感情に気づくことから(本文とは関係ありません)

こうした言葉は、否定されない安心感の中で生まれます。私たちは環境の中で価値観を受け取り、

また次へと渡していきます。だからこそ授業では、「正しさ」を急がず、自分が何を感じているのかをつかむことを大切にしています。その感覚はどこからきたのか。そう問い続けることが、自分と社会、他者との関係を見つめ直す一歩になると感じています。

〈月1回〉

学校とジェンダーの現在地



男性性研究/教育実践家 田中めぐみ

新学期、男子校の授業で、とある男子高校の卒業式の日に配られた文集の一部を教材として扱いました。生徒会が「気になる相手を振り向かせる言葉」を募集し、「傑作」として紹介したものです。そこには、性的で、他者を軽く扱うような言葉が並んでいました。しかも教員も関わっていて、こうし

た表現が止められなかったことに衝撃を受けました。

以前、ある男子校のOB教員とこんな対話をしました。「男子校で6年間過ごす中で、無自覚ににじみ出るものがある。他者からの指摘で気づかされる。男らしさを強く求める空気」とは距離をとってきたつもりでも、同じ環境にいたことで、気づかないうちに身につけているのかもしれない。その言葉に、ハッとしました。

「無自覚ににじみ出てしまうもの」の正体の一つは、「ホモソーシャル」で説明ができそうです。①女性を軽く見るようなまなざしと、②「男らしくない」とされる人を遠ざける価値観を土台に、③男同士で評価し合いながら、男性優位社会を再生産する構造です。授業でもこの用語の解説をしました。